

2014.04.20

温かな手で

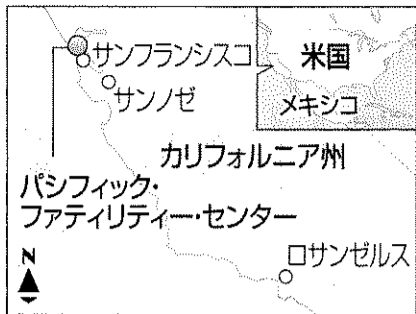
43

第4部 最先端の国から ④

出産を支える社会へ

ビル5階の院内からは、観光名所のフィッシャーマンズウォーフ、ゴールデンゲートブリッジが見渡せる。米サンフランシスコの不妊治療専門医院「パシフィック・ファティリティ・センター」。訪れたカップルは個室に通され、スタッフから丁寧な説明を受ける。

カップルが目を通すのは、遺伝的な母となる卵子ドナー（提供者）のプロフィール。若く健康な女性がファイルされたリストは匿名で、写真のほか学歴や趣味、好きな本、家族の病歴まで、詳細な情報が網羅されている。卵子の提供を受けた妊娠を望むカップルが、好みのドナーを選ぶ。カール・ハーバート院長(65)は言う。「母国ではできない特別な治療



渡航者に医療を提供

を求めて海を渡るカップルに、最高の技術と思いやりで接します」日本人も無縁ではない。同じビルの7階。日本専門の仲介会社が事務所を構え、日本語が話せるスタッフもいる。日本人に約20年前から第三者が関わる生殖補助医療を提供してきた。その数は計約千組。第三者に子どもを産んでもらう代理出産も紹介する。卵子提供では日本人留学生や日系人の卵子提供を望むカップルが多い。

自分の国では受けにくい卵子提供などの不妊治療を外国で受けることを「生殖ツーリズム」といい、世界中で行われている。日本人の場合、米国のほかインド、タイなどに出掛けている。費用は高額だ。仲介会社によると、日本から渡米して卵子提供を受ける場合、医療費やドナーへの謝礼、渡航・宿泊費などで5万5千ドル(約550万円)以上はかかる。

「決して一部のお金持ちの話ではない」(仲介会社)という。共働き

選べる若く健康な卵子



生命の誕生に関わる美術品に囲まれたオフィスで生殖補助医療について語るハーバート院長＝米サンフランシスコ

で一定の蓄えがある夫婦などが、わが子を授かるための「最後の手段」と意を決し、海を渡る。仕事に没頭するうちに40代になり、卵子の老化で妊娠が難しくなった女性。日本でも何度か体外受精に挑戦し、挫折を味

わってきたカップルもいる。ハーバート院長は「老化した卵子ではなく、第三者の若い卵子を使うことで成功の可能性が広がる」と話す。卵子をもらって子どもを持つという思い定めたカップルの多くが「授かるなら健康な子を」と希望する。これに同医院は全力で応じる。体外受精でできた胚を子宮に移植する前に調べる「着床前遺伝子診断」(受精前診断)を活用する。同医院では、対象の遺伝子疾患を限定せず、網羅的に染色体の数的異常の有無を調べる。同院ではCCS(包括的染色体スクリーニング)と呼ぶ。

院内にある広々とした検査施設には、胚(受精卵)から細胞の一部を採取するための機器などが並ぶ。できた胚は、検査を経て健康な順にランクが付き、カップルが最も良い状態の胚を選ぶ。

多胎を防ぐため子宮に移植する胚は一つだけだ。台言葉は「ワン・ヘルシー・ベビー・アット・ア・タイム(一度に一人の健康な赤ちゃん)」。男女双方の健康な胚がそろえば性別も選べる。

受精卵の段階で疾患を見分けて排除する技術は、日本では極めて限定的に使われる。ハーバート院長の見解は異なる。「深刻な疾患を避け、生まれてくる子に最大の可能性を与えてあげたいと願うカップルの気持ちは当然。倫理的にはオーケーではないか」

院長は一方で、生殖医療が目の色や頭の良さといった子どもの特徴の選択にまで進むのではないかと、といった懸念が米国内にもあると語る。「今していることは、流産に悩む人、疾患を避けたい人に向けた人助けの技術です」

ご意見・情報をお寄せください

連載へのご意見や、出産に関する身近な情報をお寄せください。
〒380-8546 長野市南県町657 信濃毎日新聞社編集局「温かな手で」取材班
(ファクス026・236・3017、メールはshussan@shinmai.co.jp)